



# 営農タイムリー!



## 発生予察情報について(10月)

2023年9月22日発行

### 病害虫発生予報第8号(10月)

京都府病害虫防除所より、10月の予察情報が発表されました。

#### 病害虫発生予察第8号(10月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))	
イネ	トビイロウンカ	並	
黒大豆・アズキ	ハスモンヨトウ ハダニ類 黒大豆 吸実性カメムシ類	<b>多</b> 黒大豆 <u>やや多</u> アズキ <u>多</u> <b>多</b>	
野菜	アブラナ科野菜 アブラナ科野菜 キャベツ アブラナ科野菜 アブラナ科野菜 野菜類全般 ホウレンソウ ネギ 野菜類全般 ネギ 野菜類全般 野菜類全般 アブラナ科野菜	べと病 白斑病 菌核病 黒腐病・黒斑細菌病 コナガ ハスモンヨトウ シロオビノメイガ ネギハモグリバエ ハモグリバエ類 ネギアザミウマ シロイチモジヨトウ タバコガ類 ハイマダラノメイガ	やや少 (並) やや少 (やや少) 並 (並) 並 (並) 並 (やや少) <b>多</b> (多) <b>多</b> (多) やや少 (並) 並 ( <u>やや多</u> ) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (並) 並 <u>やや多</u> ( <u>やや多</u> )

# イネ

## 1. 晩生水稲 トビイロウンカ

予報内容 発生量 : 平年並

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (2) 9～10月の気温が高いと増殖に好適である。
- (3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。



# 黒大豆・アズキ

## 1. ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 多い

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

## 2. ハダニ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い

発生量 : 平年比 多い

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天で高温乾燥が続くと多発しやすくなる。
- (2) 増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣るので、初期防除に努める。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

## 3. 黒大豆 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 多い

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 成虫が最も好む時期は、莢の伸張後期から子実肥大中期で、その時期が過ぎると、より好適な食草、越冬場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま留まり、黄熟期まで加害し続ける。そのため、薬剤散布は着莢期から子実肥大中期まで10日間隔で2～3回実施する。

# 野菜

## 1. アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

## 2. アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

## 3. キャベツ 菌核病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生終期に菌核が形成され、土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存する。
- (2) 適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

## 4. アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発生を助長する。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。
- (3) 台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。

## 5. アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

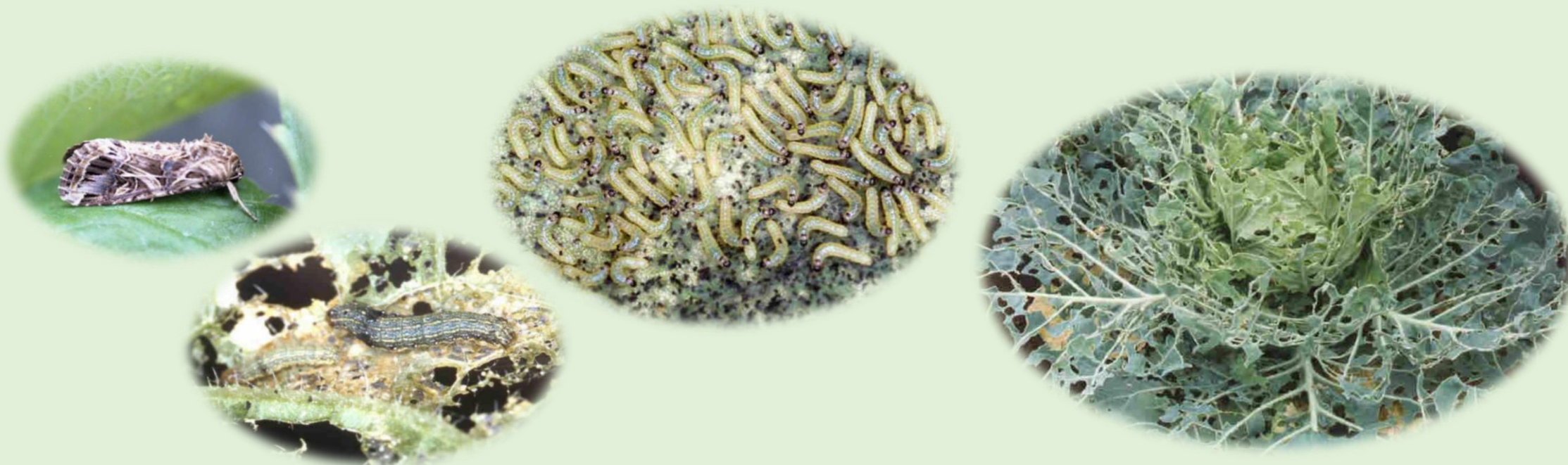
- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (4) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

## 6. 野菜類全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比多い (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。



## 7. ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量 : 平年比多い (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。



## 8. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。

## 9. 野菜類全般 ハモグリバエ類

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
- (2) 幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後速やかに行い防除時期を逸しないようにする。
- (3) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

## 10. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) アイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

## 11. 野菜類全般 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 : **平年比やや多い** (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。



## 12. 野菜類全般 タバコガ類[オオタバコガ、タバコガ]

予報内容 発生量 : 平年並

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が食入しているトマト、ナス、トウガラシ等の果実は処分する。
- (2) 幼虫が果実等に食入したり、また幼虫の齢が進むと防除効果が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期に防除する。
- (3) オオタバコガはナス科、マメ類、アブラナ科野菜等広範囲の野菜、タバコガはナス科野菜を主に加害するとされている。

## 13. アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ[ダイコンシンクイムシ]

予報内容 発生量 : **平年比やや多い** (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害になるので注意する。
- (2) 株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止し、枯死する場合がある。
- (3) は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。
- (4) ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に注意して観察し、発生を認めた場合は、直ちに防除する。



幼虫



# 今後注意すべきその他の病害虫等

## 野菜

### 1. 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、カブなど）

ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。

台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多いので、強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。

### 2. ネギ べと病

9月下旬以降、平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。

### 3. トマト黄化葉巻病 及び トマト黄化病

**トマト黄化葉巻病**は、黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、**タバココナジラミ**によって媒介される。

**トマト黄化病**はトマト退緑ウイルス（ToCV: Tomato chlorosis virus）の感染により引き起こされる病気で、**症状は葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土（マグネシウム）欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。**

### 4. タバココナジラミ

**タバココナジラミ**は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプJpL等）、バイオタイプB、バイオタイプQが確認されている。

バイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

・施設内にコナジラミを「**入れない**」。

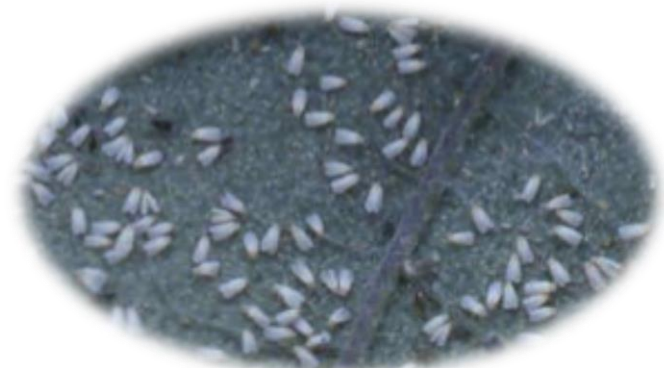
- （1）開口部の防虫ネット被覆。
- （2）黄色粘着ロールの展張。
- （3）近紫外線カットフィルムの使用。

・施設内・施設周辺のコナジラミを「**増やさない**」。

- （1）発生初期の防除の徹底。
- （2）薬剤のローテーション防除の実施。
- （3）天敵や微生物農薬の有効利用。

・施設内からコナジラミを施設外に「**出さない**」。

- （1）開口部の防虫ネット被覆。



オンシツコナジラミ



タバココナジラミ成虫



タバココナジラミ幼虫